本学卒業生・一般利用登録者の部

図 書 館 長 賞

「　命はめぐりめぐるもの　」

ひろちゃん（P.N.）

先日、離れて住む息子から、子供たち（4 歳と 2 歳）に絵本を読んであげたいので昔読んでもらった本を何冊か送ってほしいと頼まれた。かつて子育てしていた頃、そういえば寝かしつけの時に本を読んでいたな、車や電車、恐竜の本なんか好きだったなあと懐かしく思い出しながら家に残る何冊かの本を読み返した。そんな中一冊の本が目に止まった。これって幼児にはちょっと難しい話だなあと思いながら、送る本の中には入れなかった。それが「おさびし山のさくらの木」。私はこの本を自分で購入したのではない。この本を私に贈ってくれた人はどんなメッセージを私に送っていたのか。

この本を子どもに読み聞かせた当時は経験しなかった思いがある。私はここ８年ほどの間に母をはじめ大切な人達を亡くした。時間がたってみて彼らが生きている間にもっと時間を共有しておけばよかった、話しておけばよかったと悔やむ気持ちになることがあるのだ。

「もう会うことはできないのでしょうか？」と問う旅人に「会えますとも。命はめぐりめぐるものですから。また命の花のさくときに、その時のために出会ったことを覚えていましょう。」とかえすさくらの木。さくらの木は風車に姿を変えられても、旅人が命を終える時、光になって彼を迎えにきたのだという。

亡くなった人達とはもう会えないと思っている私。そんな私にこの本は新たな希望をもたらしてくれた。私にこの本の存在を思い出させてくれた息子。それこそが命のつながりなのだろうか。息子にこの本を読み聞かせていた時にはよく理解できなかった思いが、年を重ねた今は心に染みいる。いつか私も命を終える日が来たら、先に逝った人達が導いてくれるのか。また次の命を得た時違う形で出会うのか。たくさんの人間がいる中で、親子であったこと、それは大きな縁だ。またどこかで会えるのだと思うと、別れの辛さが軽減されその時の為に一生懸命に生きようという意欲がわいてくるのだ。